

ケース7

ブエノスアイレス日亜学院～日系移民の子弟の「日本語学校」から日本語教育をカリキュラムに取り入れた「トリリンガル校」への発展～（小原 学）

中南米には、日系人や移住者が設立した日本人学校や日系学校、語学学校が数多く存在する。それらの中で「ブエノスアイレス日亜学院」の特徴は、亜国文部省のカリキュラムに従った公認校でアルゼンチンで唯一日本語、英語の2カ国語学習が必須となっているトリリンガル校であることだ。中・高等学校では日本史、現代文化、政治・経済なども幅広く学ぶことができる。日本の学校の習慣や行事も取り入れられており、掃除当番は生徒が自発的に行い、運動会や学芸会などが実施されている。また、卓球、剣道、柔道、野球など、アルゼンチンの学校では珍しいクラブ活動もある。言語の学習と同様に文化交流にも重点を置いており、校内に「日亜学院文化 センター」が設置され、平日夜間および土曜日には、日本語や日本文化に関する講座を一般市民向けに開催し、多くの受講者を得ている。

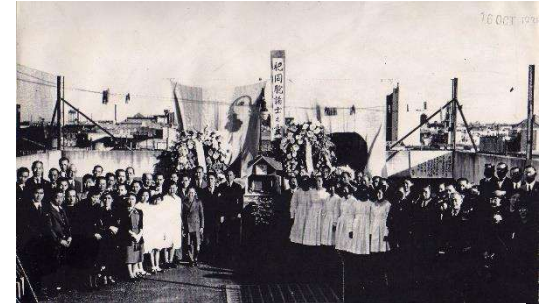


ブエノスアイレス日亜学院の外観（提供：三井デリア氏）

日亜学院の日本語教育は、1927 年に日系移民のための学校として創立された「日本語教習所」から始まる。1920 年代には日系移民が 2,000 人以上となり、アルゼンチン生まれの二世も増えてきた時代であった。海外で生まれた子弟への日本語教育には賛否もあったが、「二世も日本人の子供ならば日本語の会話ができ、日常の読み書きができる程度の日本語教育は必要である。家庭で教えればいい、という人もいるが、一般家庭では難しい。やはり日本語学校を設立して児童教育に力をつくさなければならない。」という意見が在亜日本人会において優勢であった。特に第二次大戦前の日本人移住者の場合、一財産作って故郷に戻る目的で来てい

る者もあり、その子弟が日本語や文化・習慣を身につけておくことは当時重要と考えられていた。

「日本語教習所」は当初、日曜日だけの 10 ヶ月間の短期講習であったが、順調に生徒が増えて発足からわずか 2 年後の 1929 年には新校舎へ移転し、「ブエノスアイレス日本小学校」と改称した。初めは 4 年制、1935 年から本格的な 6 年制となり、1938 年にアルゼンチン政府に認定を受けた学校となった。開校初年には 29 人しかいなかった生徒は一回目の卒業式を迎えた 1944 年には 200 人を超えていた。午前は日本語、午後はスペイン語で授業を行った。



1938 年、日西両語課程を併設した亜国最初の日系公認小学校（提供：三井デリア氏）

当時のアルゼンチンの日系人は 7,000 人を超え、「ブエノスアイレス日本小学校」の他に、各地の 6 校において日系児童に日本語を教えていた。しかし、第二次大戦も終焉間近い 1945 年 3 月、アルゼンチンが日本とドイツに対し宣戦布告すると同時にすべての日系学校が閉鎖されてしまった。

戦後まもなく、1948 年、「ブエノスアイレス日本語学校」として日本語教育と人材育成を標榜して再開された。大戦は日系社会、そして日本語教育にとって転機となった。「故郷に錦を飾る」ことが念頭にあった人たちも、好むと好まざるにかかわらず、アルゼンチンで生きていくという考えに変わったと言われる。1960 年代以降、日本が経済発展するにつれ、日本政府の公的な援助も増え始めた。例えば、1965 年、日本政府は教育レベル向上に対する経済的援助に加え、テキストや教材を供与した。1970 年代には国際交流基金の支援による教員の日本語研修が本邦にて開始された。また 1975 年より JICA は日系人支援という目的で日本語教育専門家を派遣した。

1978年に現在の「ブエノスアイレス日亜学院」に改称し、日系社会からの支援を受けて新校舎建設に着手した。そして、1984 年、日本語とスペイン語のバイリンガ

ル教育を行う日系公認小学校として開校した。更に 2010 年には日本語と英語を必須外国語としたトリリンガル教育を実施する公認校としてアルゼンチン文部省から認可を受けており、日本語教育を必修化している。

JICA としては、助成金を通じて学校の拡張計画を支援するとともに(特に中学校増設の際には5カ年計画で支援)、日系教育専門家や、海外協力隊派遣(累計 27 名)、日系研修員受入を通じた人材育成の支援を行ってきた。

1. 助成金

1988 年度: 小学部校舍増築 39,000 千円

1994～1998 年度: 中学部校舍増設 188,480 千円

2021 年度 コロナ緊急枠 拡大助成枠(施設等整備) 5,717 千円

2. 海外協力隊派遣(累計 27 名 日本語、文化、幼児教育、剣道等)

3. 日系研修員受入

日本語教育、幼児教育分野等 計 21 名

次世代育成研修: 毎年 3 名程度

その他(域内での教員研修等)

現在、同学院内には幼稚部、小学部、中・高等部に加え、2021 年に短期大学(日本学専修)が設置されている。2023 年 8 月現在の生徒数は、幼稚部(164 名)、小学部(334 名)、中高等部(171 名)、短期大学(75 名)。この他、土曜クラス及び成人対象の夜間の日本語クラス等も併せ持ち、現在、計約 1,450 名の生徒が在籍している。(教職員数 207 名)

1927 年の設立当初は、日系人子弟の継承日本語教育を目的とした学校であったが、現在では日系人子弟に限らず非日系人にも門戸を開き、非日系人子弟が総数の約 7 割を占めている。

日亜学院の理事長を務める真木(さなぎ)信明氏は、「日系移民社会の中だけの日本語教育ではなく、広くアルゼンチン社会に開かれた形で、そしてブエノス市民に認められた日本語教育そしてオリジンが日系である学校として、ブエノス市内にある有名私立校と肩を並べるような学校になる」ことを目指していると話す。過去の日本人移住者達の日系子弟に対する日本語教育への熱い思いに感謝しつつ、他

方で「日系人の、日系人による、日系人のための日本語教育には未来はない」と考える。そして、アルゼンチンの日本語教育は、「アルゼンチンの初等中高等公教育制度の中で発展を図る必要があり、日本文化の継承と伝達を日系人社会のみならず広くアルゼンチン社会に深く浸透させる使命を日亜学院は持つ」と考え、学校運営を行っている。

日亜学院の学院長をつとめた三井デリア先生は、同学院の日本語教育を長年支えてきた人物だ。三井先生は、同学院がアルゼンチン社会で評価されている理由を次の通り語る。

教育は何のためにあるのかを考えると「学問を習得するため」だと昔から言われている。しかし今の時代の傾向を見ると益々個人主義が強くなっている、学問と同様に良い人間作りが重要になってきている。それを求めている保護者は日本語を通して日本の礼儀正しさ、価値観などを学んでもらいたいという希望で子どもたちを学院に入園、入学させている。日本社会で大事にされている「思いやりの気持ち」を育てながら将来卒業生はアルゼンチン社会に貢献し、どんな仕事についても人々の幸せに繋がる役目を果たしていった欲しい。そして二つの文化を同時に身に付けていることに誇りを持ち両国の架け橋になることを願っている。



ブエノスアイレス日亜学院の運動会の様子(提供:三井デリア氏)